



特別寄稿

『小島のすさみ』の背景を読む

京都産業大学名誉教授 所 功 (法学博士)

序、本書への関心

『小島のすさみ』という紀行文の存在を初めて知ったのは、小島中学校の二年生となつて間もない昭和三十年(一九五五)である。

その三年前(同二十七年二月)、旧小島村の小島小・中学校で共用の校歌が作られた。この歌詞(各務虎雄(俳人支考の門流)岐阜大学教授作詞)の冒頭に「小島の宮の跡どころ、山門高し瑞巖寺」と詠まれている。

これは『小島のすさみ』という本に由緒が書かれていることを、社会科担当の岩井亭乙教諭から説明して頂いたのである。

しかし、

本書の既刊本(「群書類従」所収全文を読んだのは、同三

十五年(一九六〇)名古屋大学へ入ってから。しかも、それから四年後に同大学院へ進み、国史学以外の関連科目として喜多村俊夫教授の歴史地理学を受講した際、レポートに

何を書いてもよいと言われた。その際、瑞巖寺で本書の古写本を拝見し写真を頒けてもらい、全文の翻刻に群書類従本との校異および主要語句の注釈を加えたことがある。

けれども、私の専門は、平安時代の政治文化史であり、本書の研究に取り組んだことはない。

ただ、昭和五十年代から主に国文学者の研究が進み、とりわけ福田秀一博士の本格的な校注が新日本古典文学大系の『中世日記紀行集』(岩波書店・平成二年)に収められた。

また、旧春日村の郷土史家大久保甚一氏も、福田博士の指導を得て編集された『小島のすさみ全釈』(笠間

書院・平成十二年)を出版されている。

さらに、地元では、令和二年(二〇二〇)揖斐川歴史民俗資料館において特別展示が行われ、桑原隆一氏の文と絵による上品な絵本『小島のすさみ・蘇生の泉』(瑞巖寺住職岡部大治氏監修)も出版されている。

従つて、今さら門外漢の私に出来ることは無いに等しい。ただ、本書の真価を理解するには、本文の通釈や語注だけでなく、その歴史的な背景を補説することも無意味ではないと思ひ、それを四つの観点から略述してみたい。

一、皇統史上の背景

本書の著者・二条良基が小島まできたのは、北朝四代の後光厳天皇(一三三八〜七四)に奉仕するためである。

そのころの皇位継承は不安定極まりなかった。すでに大覚寺統の後醍醐天皇が京都から脱出されると、足利高氏(尊氏)が持明院統の光厳上皇を擁し、南北朝の対立期に入った。その北朝は、①光厳天皇から②弟の光明天皇を経て③甥(①の長男)の崇光天皇へと受け継がれた。けれども、足利氏の内紛(高氏と弟直義との抗争)によって、北朝の観応二年(南朝の正平六年(一三五二))十月、將軍高氏と義詮父子が南朝に帰順し、③崇光天皇は退位を迫られるに至った。

そこで、北朝を奉ずる足利氏は、

翌年(文和元年)八月、神器不在のまま③の弟を、新たに④後光厳天皇(数え十六歳)として立てた。

しかし、南朝勢力(北畠親房、楠木正儀など)に京都へ攻め込まれ、翌文和二年(一三五三)六月、④後光厳天皇は義詮に擁されて美濃へ落ち延びられることになった。

このような混乱が当時の実情であった。しかし、それでも天皇の權威は不可欠とされ、武門の將軍が皇位を奪うことはなかったのである。

その要因は、歴代の天皇が古代以来の血統(連続性)だけでなく、研学修徳によって品位(文化力)を身に付けた格別な学徳の保持者と認められてきたからだと思われる。

ちなみに、北朝①光厳天皇(量仁親王)の叔父にあたる持明院統の花園天皇(一二九七〜一三四八)は、「両統迭立」(交互即位)の約定により、次代を大覚寺統の後醍醐天皇に譲った後、甥の量仁親王が皇太子に立てられた。

そこで、元徳二年(一三三〇)その皇太子(数え十八歳)に対して、宸筆「太子を誠むる書」を与えておられる。すなわち愚かな人々は、「吾が朝は皇胤一統(万世一系)だから、徳が少くても「異姓篡奪」(易姓革命)など起きないと誤解している。しかし、



後光厳天皇
(皇居三の丸尚蔵館収蔵)